

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「長野県林業の未来を語る ～森林県から林業県へ～」

日 時 平成28年7月16日（土） 午後1時30分から3時30分まで

場 所 上松町 ひのきの里総合文化センター（上松町）

目 次

1 開会	P 2
2 知事あいさつ	P 3
3 赤堀氏（進行役）あいさつ	P 6
4 取組発表	P 10
① 木曽南部森林組合 今井竜太氏	P 10
② 林業女子会@しなの 榎本浩実氏	P 13
③ 株式会社Tree to Green 鈴木潤吾氏	P 17
5 意見交換	P 24
6 知事総括	P 34
7 閉会	P 35

【参加者】

県民 116人

長野県知事 阿部守一

進行役 林材ライター 赤堀楠雄氏

取組発表者

- ① 木曽南部森林組合 今井竜太 氏
- ② 林業女子会@しなの 榎本浩実 氏
- ③ 株式会社 Tree to Green 鈴木潤吾 氏

1 開 会

【長野県木曽地方事務所 林務課 秋山巖】

皆様、お待たせいたしました。本日は大勢の方にお集まりいただき、まことにありがとうございます。

ただいまから「県政タウンミーティング」を開催いたします。意見交換までの進行を務めます、長野県木曽地方事務所林務課の秋山巖と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日の県政タウンミーティングは、豊かな森林に囲まれましたこの木曽の地で、長野県の林業について皆様と考える機会にしたいと思っております。終了の時刻はおおむね3時30分までの予定で進めてまいります。なお、本日の意見交換の内容は、お名前などの個人情報を除き、後日、県のホームページで公開させていただきますのでご承知おきください。

また、本日は取材の関係で報道各社も多数おられます。大変恐縮でございますが、参加者の皆様方の中で、取材の映像等について支障のある方はその場で拳手いただけますでしょうか、よろしいでしょうか。報道機関の皆様はご確認いただき、ご配慮等をお願いしたいと思います。

なお、お手元の封筒の中にアンケート用紙がございます。タウンミーティング終了後に回収させていただきますので、ご協力をお願いいたします。

それでは次第に沿って進めてまいります。本日の進行役は上田市在住の、林材ライター、赤堀楠雄様をお願いしております。

赤堀様は東京都のご出身で、大学卒業後、10年余にわたる林業・木材産業専門新聞社にお勤めの後、フリーになられ、現在は森林・林業木材産業を専門とするフリーライターとして、全国を回って取材や執筆はもちろん、各地で講演会の講師としてもご活躍されています。全国の森林・林業の事情に明るく、広い視野で長野県の林業についてご助言いただけると思います。

それでは、以降の進行を赤堀様をお願いしたいと思います。赤堀様、よろしく願いいたします。

【赤堀楠雄氏】

皆さんこんにちは。ここにいる方たちに最初にちょっと顔だけ披露させていただきますけれども。

今、ご紹介いただきました赤堀楠雄と申します。東京生まれで、2010年から長野県の上田市に移住しまして、山間の集落に住みながら林業と木材と木造住宅等々、全て木にかかわる関係の取材をして記事を書いているという、そういういわばフリーライターと

して活動しております。

本日はこういう機会を設けていただきまして、しかも場所は木曽の上松ということで、ある意味、全国的にも知られた林業のメッカでこういう場を開催するということになりましたので、この機会に、皆様のご意見も伺いながら、信州の林業の将来をどういうふうにこれから描いていくのか、忌憚のないご意見をいただきながら議論を進めていきたいと思っております。

最初に、知事から、長野県の森林・林業の思いも含めまして、ごあいさつを賜ればと思いますので、よろしくお願いいたします。

2 知事あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

皆さん、こんにちは。今日は県政タウンミーティング、大勢の皆様方にお集まりをいただきまして、大変ありがとうございます。

今日で、実は私は木曽に滞在、3日目でありまして、おとといから移動知事室ということで、木曽の合同庁舎に臨時の知事室を設置をして、3日間、どっぷり木曽につかって木曽の地域の皆様方と対話をして、いろいろな課題を共有させてもらったり、あるいは未来に向けての夢やビジョンを共有させていただいたりということで過ごしてまいりました。今日、この後、「お六櫛」の生産に携わっている方とお話をして、その後、長野市に戻るわけですが、

木曽地域、私はやはり、わずか3日ばかりの滞在ではありますが、いろいろな資源が豊富なところだなというふうに改めて感じています。特にその中でも産業面では森林林業をどうしていくかということは、これまでの木曽地域を支えてきた産業であることはもとよりでありますけれども、未来に向けても私は大きな可能性を持った産業だというふうに思っています。

木材の価値というものは、最近、急速に見直されてきているというふうに思っておりますし、木材を加工して材として活用することだけでなく、エネルギー、木質バイオマス材料として活用していくこと、あるいは、この木曽地域でも行われていますけれども、森林そのものを観光資源としたり、あるいは森林セラピー、癒しの場として使ったりということで、いろいろな可能性があるなというふうに思っています。ただ、そうはいっても今まで、これ多分、行政で言えば、みんな縦割りでいろいろなことをやっていますので、今までと同じ発想、今までと同じ取り組み方で進んでいけば、林業がますます発展するかというと、必ずしもそうでもないのではないかというふうに私は感じています。

今日は赤堀さんにファシリテーターをやっていただいて、そして3人の若い森林・林業関係の皆さんから事例発表していただき、そして会場の皆さんとも意見交換をしながら

ら、ぜひこの森林とともに暮らしてきた、そして林業とともに発展してきた木曾の力、次の時代に向けてのあり方を皆さんと一緒に考えていきたいというふうに思っています。

今日、「長野県林業の未来を語る～森林県から林業県へ～」というふうに書かせていただいていますけれども、6月に全国植樹祭を開催をしました。私は大勢の関係の皆様方に改めて感謝を申し上げたいというふうに思いますし、長野県のさまざまな分野の皆さんがいろいろな形でご協力いただいたおかげで、大変すばらしい、全国にも誇れる植樹祭になったのではないかなというふうに思っています。

そのとき、私、あいさつの中で、森林県から林業県へという話をチラッとさせていただきました。その話、両陛下もご臨席されていたので、森林県から林業県へというのは一体何だということをご質問いただいて、私の思いを少し述べさせていただいたわけがあります。

長野県は県土の8割が森林ということで、森林資源に恵まれています。先ほど申し上げたように、私たちの暮らしは、いろいろな意味で森林に支えられてきています。時に災害の、例えば手入れができていない森林は災害の要因になったりするというので、プラスの面だけでなく、我々が対処しなければいけないマイナス面も全てひっくるめて、私たちは、特に長野県は森林と一緒に、森と一体で暮らしてきたといっても過言ではないというふうに思います。

これから、私はやっぱりこの資源をもう一回、新しい視点で生かしていきたいというふうに強く思っています。それは、今、地方創生、あるいは私どもは信州創生といっていますけれども、どんどんどんどん地域の人口が減少していく。特にこの木曾地域は長野県の中でも高齢化が進み、そして人口減少もほかの地域以上に早く起きてしまった、そういう地域であります。

この地域、このままのトレンドでずっといくのかというふうに考えたときには、私は歯止めをかけなければいけないというふうに思いますし、必ず歯止めをかけられる、単に歯止めをかけるという意味だけではなくて、もっと新しいビジョンを描いて、より夢の持てる地域にしていくことは十分可能だというふうに、この3日間、いろいろな方とお話をする中で私は実感しています。必ず可能性が開けてくるなというふうに思っています。

ただ、それは可能性があるだけで、可能性を生かさなければ、これ実現しないわけでありまして、今日は、ちょっと私はこの森林・林業の別に専門家ではないので、赤堀さんを初めちょっと皆さんのお話を聞かせていただく中で、私自身も自分の考え方、よりクリアにしていきたいというふうに思っていますし、またそういう中で、この森林県から林業県へという、本当に意味で林業として、産業として森を生かしていく、そうした県にしていく上で、ぜひ考え方とか、視点を皆さんと共有していきたいというふうに思っています。

そういう意味でぜひ、今日は発表をしていただく皆さんはもとより、会場で参加して

いただいている皆様方にも日ごろの思いとか、あるいはもっとこうしていきたいと、こういう県にしようというご提案を積極的にいただければ大変ありがたいというふうに思っています。ちょっと、私のあいさつが長くなり過ぎてはいけないので、この程度にいたしますけれども。

私は県政運営の基本姿勢は、共感と対話の県政ということによっています。共感と対話であります。どうしても行政は、まじめにやればやるほど、法律がこうなっているから、補助金がこういう補助金だからということで、与えられた仕事に一生懸命になりがちであります。これはもとより、別に悪いことではないですけれども、それだけでは行政としては失格だというふうに思って、共感と対話といつも言っているんですけれども。

やはり、私も県でいえば、やっぱり県民の皆さんの夢や希望を実現していくということが、何よりも我々の第一の使命であります。その使命を果たす上では、県民の皆さんがどんなことを考えているのか、何を期待しているのか、どんな希望を持っているのか、そういうことを共有しなければ始まりません。そのために共感をしなければいけない。いろいろな方のお話を聞いて、まずは共感していきたいというふうに思っておりますし、共感するというのとは一方通行の話だけになってしまいますので、私は結構、いろいろなところで、こうじゃないかとか、もっとこうしたほうがいいんじゃないかとか、よく訳のわからないのに余計なことを言っているなというふうに自分でも時々思うことがありますけれども、でも、責任ある立場の人間として私なりの思うところをいつも述べさせていただいています。それでキャッチボールをすることによって、私の考えや及ばないところに気づくことがあるし、あるいは対話していただいている方が、県は、あるいは知事はこんなことを思っているんだと、それだったもったこういうふうと一緒にできるみたいな気づきを持ってもらえることもあります。そういう意味で、共感と対話の県政ということによって、進めています。

今日のこのタウンミーティングも、その共感と対話という姿勢で私は臨んでいきますので、ぜひ皆さんも、そういう意味で率直な意見をどんどん出し合っていていただいて、そしてみんなの意見をあわせることによって、より明るい未来が開けるように、一緒になって取り組んでいってほしいというふうに思います。

上松町に来てこの話題に触れないわけにいかないの、御嶽海、今、頑張っています。頑張っているけれども、前頭筆頭というところで、かなり出だしは苦戦していますけれども、これからも郷土の代表力士として、皆さんと一緒に応援していきましょうということを最後に申し上げて、私からの冒頭のあいさつにしたいと思います。

今日はありがとうございました。よろしくお願ひします。

3 赤堀楠雄氏（進行役）あいさつ

【赤堀楠雄氏】

どうもありがとうございました。

それでは、早速始めさせていただきたいと思います。今日この会場で、僕をはじめ知事、パネラーの3人、ちょっと向き合う形でずっと進めさせていただきますのでご了承ください。

最初に、皮切りにちょっとファシリテーターを今日、お任せいただいたということもありまして、僕自身が森林や林業に対して、今、どんな問題意識を抱いているのかということやちょっと、さわりだけお話をいたしまして、皆さんの議論の糧にさせていただきたいと思っています。

ちょっと、ではスライドのほうを・・・スライドショーにさせていただいて。

「森林県から林業県へ」というタイトルをいただきまして、実は僕も以前、林業白書、今、森林林業白書といいますけれども、そこの中で、日本は世界有数の森林国であるという記述があったときに、ちょっとした問題意識を覚えまして、やっぱり森がただあって森林率が高くてと、それだけではなくて、今、知事もおっしゃいましたように、我々の暮らしと森とのかかわりをもう一度密接にしていきながら、単に森林があるという国ではなくて、林業を営む、林業というのはもっと広い意味で僕は捉えているんですけれども。この豊かな森林がただあるだけではなくて、人とのかかわり、密接にしながらよりよく活用するというような問題意識で、実は「森林国から林業国へ」と、ちょっと同じテーマで実は講演タイトルを使わせていただいていた時期がありました。

上松へ来たので、ちょっとこの写真は、平成17年の6月3日、ちょうど今からもう11年前ですか、赤沢の自然休養林で伊勢神宮の御遷宮の御用材を最初に伐採する御杣始(みそまはじめ)祭が行われたときに、そのとき会場にいまして、朝から晩まで、実は翌日までずっと取材をしました。そのときの写真なんですけれども、これ1時間ぐらいかけて1本、切っていったわけなんですけれども、昔ながらの方法で切って、これをずっと1,000年以上も続けられてきたということを目の当たりにしながら、我々人間と森とのかかわりの原点を見たような、そんな思いに捉われたのがこのときの催しでありまして。今日は、上松に来たのでこの写真を冒頭に持ってきました。

今の写真がこれで、翌日皆さん、もしかしたらこの中にもこの写真に写ってらっしゃる方がおられるかもしれませんが、この御神木を町内練り歩いて披露されたというイベントでした。

僕は東京で生まれて、2010年から長野県に住んでいるんですけれども、林業の取材をする中で、実はこの木曽という地域には何度か足を運んできておりまして、この写真の中には、木曽五木のうちの、これはサワラの組み板ですね。これ上松で撮りまして、この手の方は実はこの上松在住の、ちょっとそれ以来、僕はお会いしていないので今はわ

かりませんけれども職人さん、これはネズコのヘギ板ですね、手で押さえている、この方も上松の方。これは僕がちょっと奈良井で、奈良井宿でヒノキの曲げ輪ですね、曲げ輪も体験させていただいたとき。これはここに来る途中で、今日もありましたけれども、日義の交差点のところ履物屋さんがありますけれども、そこでネズコの下駄というのがありますね。そのネズコの下駄。これ原木の市場があり、これは上松で実は2008年にあるイベントでこの上松へ来たときに泊まったときの民宿のご夫婦です。旦那さんがずっと屋根仕事をなさってこられたということで、奥さんが昔のオガ鋸（ノコギリ）を手にとられて、昔、どんな暮らしをやってきたのかということに参加者に話してくれているときの写真なんですけれども、これが木曽ヒノキの千本立ちですね、300年生の純林。

この民宿でお話を聞いていたときに、昔はどんな暮らしをしてきたのかという話を旦那さんがなさって、それは本当に山の中そのものの暮らしだったんですけれども、その話を聞きながら、今日も上松という土地柄、おそらく森林や林業にさまざまな形でかかわってらっしゃる方々が多いとは思いますが、我々が森林とか林業に対して抱いている気持ちというのは、では果たして、この社会全体の中で本当に共有されているものなんだろうか、あるいは共有してもらえるような形で我々は発信しているのだろうかという問題意識をこのときに持ちまして、というのは、この二人の話が本当に、いかに山の中で真摯に自然とかかわり合ってきたかというお話だったんです。これをもっとたくさんの人たちに知ってもらいながら、森とかかわるということは単にその山間部だけのことではなくて、もっと大きな意味で、我々の暮らしというのが森林とかかわっているんだということを、もう一度、この社会全体に訴えていかなければいけないということを強く思ったんですね。

これはさっきの御神木がいかに大きいかというのをちょっと映すために入れた写真です。すみません。

ここに、日本の林業は必要かということを書いたのは、その民宿にいたときにふと思ったことなんですけれども、というのは、こうした問いかけをよくされるんです。例えば最近で言いますと、金融経済の研究をしていた人たちからちょっと食ってかかられるように、今、林業というのは産業としてどうなっているのかと。ご存じのように助成金を使いながらやっていて、日本の経済にどれだけ貢献しているのかと言われる中で、果たして、それが十分な貢献ができていないようだったら、この森林をもっと経済的な利益が出てくるような、別の用途に転用すべきじゃないかということまで言われたんですね、真顔で。驚いてしまったんですけれども。

ただ残念ながらというのか、我々こうして、僕も普段、林業界にどっぷりつかっているので、こんなことはもう当たり前のことだと思っているんですね、林業がこの国にとってとても大切な産業だということ。ところが、社会全体ではそれを共有してもらっているのかどうかということをやっぱり我々考えながら、その林業の将来をこれから考えていくときには、本当に林業というのはこの国にとってどういう形で発展していくの

かということ、もっと広いステージで議論するべきだということ強く感じます。

つい最近もある30歳前後の商社マンから、本当に今、その林業というのがこれから日本で必要なのかということの答えを出してほしいと言われて、いろいろな話をしたんですけども、その彼を本当の意味で納得させることができなくて、ちょっと忸怩たる思いが残ったんですけども。そういうその社会の中で我々林業と向き合っているんだということ、やっぱりまず押さえておく必要があると思うんですね。

ですので、多分、今日はもう林業は、森林はとなったらそうだなという共感できる人たちが多くここに来ていらっしゃると思うんですけども。我々が考えていることというのをやっぱり広げて議論を喚起していくためには、やっぱり外に向けて、普段、考えたことのない人たちとのかかわりをどれだけつくっていくかということはとても大切だと思うんです。そういう意味では、今日はここでの議論というのも、信州の林業の未来を考えていく中では、どうやって本当の意味での社会全体に働きかけにつながっていくかという視点も持っていきたいと思っています。

やっぱり必要だと思うんですね。というのは、自然と我々の関係を考えてときに、対峙するというのはそれぞれ向き合っただけですけども、何か対峙するのではなくて、やっぱり自然と人間というのは共生していくということにこれから、ずっとこれまでもそうですし、これからの道筋が必ずあると思うんですね。それやっぱりかかわりを持っていくことだというふうに思っています。

これは僕の知り合いの設計士の男性と大工をやっている女性というのが、友だち夫婦がいるんですけども、その彼はある時期、ある東北の本当の山間、山の中で、水道、ガス、電気というインフラが全くないところで自給自足に近い暮らしをやっていたんです、自然そのものの。その設計士が実は都会の、バリバリの都会の人間だったんですけども、ある日、彼らの山の中の住まいを訪ねていったときに、泊めてもらったんですけども、ご飯を食べて一杯やって、寝る前に歯を磨くときにその設計士が、歯ブラシだけで歯磨き粉を使わなかったんです。僕は以前、その彼とは全然別のところでちょっと取材旅行をやったことがあって、そのとき彼は普通に歯磨き粉を使っていたので、あれ歯磨き粉、あなたは使わなかったかといいましたら、結局その山の中は排水、下水は当然ないんですね。つまり自分たちが出したものを自然の中に排出するしかなくて、水も全て自然から得るもので、その循環の真っ只中にいるという、直接のかかわりの中にいるときに、彼はやっぱり足もとに、歯磨き粉というものを口の中からペツとやることができなくなってしまったと。僕はそこで歯磨き粉を使うなということ言いたいのではなくて、やっぱり我々の暮らしというのは本来的に自然とのつながりがあって、直接、間接であるわけですけども、今もかかわりがあることは変わらないと思うんです。その大元の森である自然なりに対するかかわりをどうやって具体的にイメージしてもらえよう人々を増やしていくかということがとても大切だと思うんです。

そのかかわりということなんですが、これは僕の考えなんですが、林業というのはど

ういう範囲のものを言うのか。これも、ある山間地である森林組合の組合長さんに言われたんですけれども、そこはもう本当に山の中で、自分たちはその地域でどういう暮らしをしてきたのか。山から鳥を捕まえてきて食べたり、その鳥を剥製にして売ったり、漆をかいてみたり、あるいは、ちょっと伐採して日当たりをよくして蕨をいっぱい生やして、その山菜を売ってみたりと、とにかくありとあらゆる山の恵みというのを利用して暮らしを成り立たせてきたんだという話をしてくれたことがありまして、それを聞いたときに僕はそういった、ありとあらゆる山の糧をかかわりを適切に試しながら暮らしに生かしていく、暮らしを成り立たせるということが林業そのものなんだろうと思ったんです。我々はずいぶん材木ということに目が行きがちで、もちろん材木は重要な山の産物なんですけれども、山と人と人がいい形でかかわりながら、その過程を我々が生かして暮らしを成り立たせていくことが林業そのものだ。それを、僕は実はこの営林という言葉が昔から好きでして、今日、森林管理局の方がいらっしゃるかわからないんですけれども。昔は営林署、営林局とっていたのが、今、森林管理局、管理署になりました。それはいろいろな理由があつてなつたんですけれども。

林業を営むという、いわばちょっと漢語的な言葉ですけれども、これはとても広い意味があると思っております。単に教材的に云々ではなくて、今、僕が言ったような、いろいろな形で山とのかかわりを得ていく。それが営林という言葉に込められた思想なのではないかということとを以前から思っております。そういった、実際、営林というのは、先ほども言いましたけれども、直接、間接を問わなければ、都会にいる人たちだって、実は営林のこの一つの大きな枠の中にいるかもしれない。そういった形で、この営林という、山と自然との大元の自然とのかかわりというものを我々一人一人が都会にしようが、山間地にしようが、自覚しながら自分たちの暮らしのあり方を考える、将来を考えていくということが、これから求められていくのではないかとことを普段から思っております。そのあたり、では具体的にどうするかという道筋を今日は皆さんと議論しながら深めていければなということも思っております。今日はやってきました。

ということで、僕の問題意識を申し上げましたけれども、今日はいろいろな、もう本当にフリーハンドで皆さんからご意見を伺いながら、信州の林業を語り合っていきたいと思っております。どうもありがとうございました。

そうしましたら、今日はお手元に資料もあるかと思いますが、3人の若手のこれから信州の林業、あるいは木曾の地域を背負って立っていただかなければいけない3人の若手のスピーカーに登壇してもらって、その方々にまずご自分がどんな活動をなさっているのか、どんな問題意識を持っているのかということを発表していただいて、それも踏まえながら後ほどディスカッションをやっていきたいと思っております。では最初に今井さん、自己紹介と、あと発表のほうをよろしく願います。

4 取組発表

【木曽南部森林組合 今井竜太氏】

「職業としての林業の魅力について」、木曽南部森林組合、今井竜太です。お願いします。

ここで簡単にプロフィールを説明します。平成4年上松町生まれ。平成23年3月に木曽青峰高等学校を卒業し、同年4月に木曽南部森林組合に採用されました。

最初は上松の造林班で森林整備を担当し、主に植栽、下刈、枝打ち、間伐、緩衝帯整備に携わってきました。現在は大桑の生産班で木材生産を担当し、伐採を行い、高性能林業機械で集材、造材、搬出を行っています。

林業を職業にしようとした動機ということで、私の祖父母は木曽駒ヶ岳のふもとで山荘を営んでおり、小さいころから身近に木曽駒の四季折々の移り変わり、山の恩恵を感じ、山の幸を取ったり手にして、祖父母から登山や狩猟、山菜とり、きのことり、枿の実拾い、魚釣りなど、いろいろ教わり、山が大好きになりました。そんな祖父母の影響もあり、山や木が好きなので、高校入学当初は建築士や大工に興味を持っていましたが、ちょっと数学が苦手なため夢を断念し、進学か就職かを迷っているうちに、木を切ったり、何か山に恩返しができる仕事ということで林業という職業を選びました。

林業に必要な資格、私が持っている主な資格ということで、まだほかにもいろいろ資格は持っていますが、白い字と赤い字で色分けされていますが、まず上から簡易架線集材装置運転、伐木機械等運転、走行集材機械運転とありますが、上の3つは、今、高性能林業機械などいろいろありまして、それを乗るために必要な資格となっています。またその資格を取得するには実務経験が必要とされます。

下のほうにありますが、車両系建設機械運転、高所作業車運転、小型移動式クレーン運転、玉掛け技能などとありますが、下の4つの資格は在学中に取得してもので、そのおかげで現在も幅広いお仕事に着手することができ、大変役立っております。

ここで簡単にちょっと絵を見ていただいて、人工林の生育と主な手入れということで、ちょっと時間の関係もあるので、簡単に説明をさせていただきます。

地ごしらえには、主に立ち木の地ごしらえと笹の地ごしらえがあり、簡単に言うと、生えているものを刈り、地面を出し、植栽のときにクワで掘りやすくします。また刈り取ったものを棚にし、植えた木を雨・風から守ります。そうして植栽、下刈があり、つる切り・除伐といって下層の支障となる、ツル、ヤブを切り、ヒノキなどの成長に支障がないようにします。そして、間伐でよいもの悪いものを間引きし、主伐となります。

簡単に説明してしまいましたが、近年、獣害が深刻な問題で、私の個人的な考えではありますが、日本も県内もそうだと思いますが、ハンターの減少はもちろん、日本の住宅着工件数も減少し、農業被害も拡大して木材価格低迷といった課題がいろいろな条件で重なり、大変危機的です。

木曾では、昔から天然のヒノキを使ったり、木曾五木を使って伝統工芸や木を切る技術など、いろいろ良い技や文化がありますが、もう少しヒノキ、スギ、もう少し針葉樹からこだわりをなくし、動物と共存できるような山づくりができたらと個人的に考えております。

見ていただけるとわかると思いますが、これは立木の伐採です。木を伐採するには、まず受け口、追い口の順で切っていく、ツルというものを残します。そのツルというものをうまく利用し、木をコントロールし、倒しこみます。そのツルの残しぐあいも絶妙で、残し過ぎてしまえば木は裂けてしまったり、切り過ぎてしまえば、作業者の安全にもかかわってくる、とても危険な作業になります。

立木を伐採したあとの集材ということで、うちの組合では、先ほど言っていた高性能林業機械でありますスイングヤーダを使って簡易架線を張り、約100メートルから150メートルの距離を集材しています。ちょうど、写真ではわかりにくいとは思いますが、ちょっと大きい重機なんですけれども、腕しか見えないんですが、建設機械をベースとし2胴のワイヤードラムがついており、その2胴のワイヤードラムからワイヤーが出ていって、上や下に自由自在に木を寄せたり集材することが可能です。

これは造材の写真になるんですが、造材といっても、手造材と高性能林業機械のハーベストプロセッサを使った機械の造材になり、我が組合では効率的な造材もいいとは思いますが、木の質や樹種によってできる限り傷まないように、傷物にならないように最善の注意を払い、木を扱っております。

また、4メートルとかいろいろな長さで市場で並ぶと思うんですけれども、同じような木でも、やっぱりきれいに造材されて化粧された木が買い手からも喜んでいただけると思うので、そんな買ってよかったと思われるような材木づくりを目指してやっています。

次に積込・運材です。材木を積んで今、ダンプに乗せているところなんですが、これもフォワーダといって高性能林業機械の一つであります。ちょっと写真が見にくくて、ちょっとあまりいい写真ではないんですけれども、こうして運んできてすぐにトラックに載せられるものは載せることはできるんですけれども、やっぱり多くの量の材木をさばいていかなければいけないので、載せきれないものや処理できないものというのは一旦、はい積みという積み方でここに仮置きしてあります。

先ほどは作業道でフォワーダを使いトラックに載せていましたが、林道のようによい道でしたら、このようなグラップル付きの大きなトラックを入れて、市場まで運材をすることもあります。

現在、私は生産班で木材生産の仕事だけではなく、こういった山を背負っていて、近隣の住民の皆さんも、木がいつ倒れてくるかわからない中での場所にはなりますが、自然災害から地域の皆様の生命・財産を守ることも森林組合の大切な仕事だと思っています。

これはクレーン伐採でゴンドラに乗って、大きな木は根元から倒せることに越したことはありませんが、そういった大きいものをピンポイントに倒すというのは大変に難しく、こうして細かく枝を切って小さくして、木の丈をできるだけ短くした上で、根伐か、クレーンでいう吊り切りという方法があるんですが、そういったいろいろな方法を用いて伐採を行います。

ざっと、今、自分がやっている仕事について説明をしましたが、今、林業をやって5年目になります。苦勞があったから今があると思っています。最初、組合に入ったときに作業班には同世代がいなく、また一つ上の先輩は年の差が30歳以上で、簡単にあらわすと、自分のお父さんやおじいさんの間の人たちが班の上司でした。林業はとても危険ですので、いろいろと丁寧に教えていただけたらと思い林業の道に進んだんですが、職人氣質で手取り、足取りを教えてもらえないというのもあり、また日々、3年間怒鳴られ続け、何とか耐え忍び、今があります。

私の仕事、私の夢、目標ということで、技術を高め、自分の技を後輩に伝えていきたいとありますが、残念ながら、まだ組合では僕が一番年が若く、後輩が入ってきていませんが、将来的には、自分が苦勞してきたこと、いいこと、悪いことがあります。もう少し自分から歩み寄って、これから林業を始める人に技を伝えていきたいという気持ちもあって、書かせていただきました。

2つ目に、生まれ育った木曾谷で、身近な里山づくりを通して木曾に恩返しをしたいということで。祖父母の影響もあり、こうして林業に就いているんですけども、いろいろと、山での楽しいことや、いろいろな山の幸とか、醍醐味を教わったので、そういった木曾の山に恩返しをしたいということで書きました。

3つ目に、山離れをくい止めたい。山に関心を持ってもらいたいとありますが、今は、大変高齢化と過疎化が進んでおり、山に興味があっても足を運ばなかったり、自分の山がどこにあるんだろう、もう山は要らないという人も多々います。そういった中で、木曾は大変急峻で、路網の搬出には向いていませんが、架線集材ではどうしても山に行きたいといっても自分の足で歩いていかなければいけないというのが現状で、できる限り、山を崩さないように、山が傷まないように、考えた上で少しでも山に興味を持ち、足を運んでいただけるような林業をこれから目指していこうと思います。

4つ目に3Kということで、危険、きつい、汚いといわれていた林業において、個人的な、これ目標のようなものになるんですけども、綺麗、快適、気配りにしていきたいということで、はっきりいって、1日林業をやってくれば、作業着はすごい油まみれで泥だらけで、あまり快適ではありませんが、今、高性能林業機械などいろいろなものが出てきており、そういったものもうまいこと生かし、また、安全面でも防護ズボンや、快適で常に自然の温度変化に対応できるような上着も出てきており、こういった、若者がカッコいいと思うような林業を目指していきたいと思います。

最後に気配りというふうにあります。やっぱり職人稼業というところがありますが、

林業はチームワークで仕事を進めていくので、若い人からベテランの人まで、いろいろな年代の人が集まり作業をしています。そういった中で、やっぱり精神的につらい場面や肉体的につらい場面が重なり労働災害が起きてしまうと思うので、そういった労働災害を減らすには、これちょっと気持ちの問題にはなってしまうんですが、人それぞれ思いやって心配りがあれば、少しは労働災害も減ると私は考えます。これで発表を終わりにします。

【赤堀楠雄氏】

どうもありがとうございました。とりあえず3人の方にやっていただいて、後で知事からまとめてコメントをいただくという形にしたいと思います。では今井さん、どうもありがとうございました。

では続きまして、榎本さん、発表をお願いいたします。

【林業女子会@しなの 榎本浩実氏】

皆様、こんにちは。本日はこのような場でプレゼンをさせていただく機会を設けてくださりまして、本当にありがとうございます。ごらんとおり、私、今、すごく緊張しております、お聞き苦しい点が多々あるかと思いますが、先ほど、しょっぱな赤堀さんの話にあったように、ちょっとかぶっていてびっくりしたんですけども、「山と暮らしをつなげる」というテーマで、林業女子会@しなのの代表、そして木曽町地域おこし協力隊の榎本がお話をさせていただきたいと思います。

まず初めに、自己紹介をさせていただきたいと思います。私は大阪府富田林市で生まれ育ちました。長野県は高校卒業後、進学のために来ました。私は周りに自然がほとんどない新興住宅地で育ったのですが、両親がすごい自然が好きで、週末にはよくキャンプに行ったりして自然の中でよく遊んでいた経験から、植物、特に木が大好きになり、高校は農業高校に進学、木についてもっと学びたいという思いから、林業大学校に進学しました。

林業女子会@しなのは学生時代に設立した任意団体になります。仕事との両立が難しく、積極的に活動ができているとは言えないのが現状ですが、林業女子会@しなのを立ち上げたことにより、たくさんの素敵な方々と出会うことができました。現在は木曽町の地域おこし協力隊として「ふるさと体験館」という施設で働いております。ですので、私は直接、木とかかわることを生業とはしていません。

今回のコメンテーターの方は、仕事としてガッツリ森や木とかかわっていらっしゃるのですが、そのため、私のプレゼンはかなりソフトな話になると思いますのでご了承ください、すみません。ですが、林業女子会@しなのと地域おこし協力隊として、今、行っている活動や思いを話させていただけたらと思いますので、よろしく申し上げます。

次に、私の勤務しているふるさと体験館について、お話させていただきます。ふるさ

と体験館は築88年の廃校を活用した体験施設であり、木曽の地に代々受け継がれてきた暮らしの知恵を体験として地域内外の人に提供している施設です。このままいくともう絶えてしまうかもしれないというような貴重な知恵なども、小さくですが、講習会などを開催して後世に受けついでいます。

私はこの施設が木曽町にとってとても重要な施設であると感じています。木造の校舎も重厚感があり、とても魅力的になっていますので、ご存じの方がほとんどだと思いますが、近くにお越しになった際は、ぜひ足を運んでいただけたらうれしく思います。

さて、今日お話をさせていただく内容の大きな流れですが、林業女子会@しなのとしてのどのような活動をしてきたのか、そして今後の展望や思いなどをお話させていただきます。

林業女子会@しなのは、平成26年11月30日に設立いたしました。メンバーは現在16人います。

設立目的は大きくわけて3つありまして、1つ目が長野県内にいる林業に興味を持っている女性のネットワークをつくり、意見交換・情報交換をしていきたい。2つ目が、県内にいる人に林業を身近に感じてもらい、好きになってほしい。3つ目が、林業を子どもたちの職業選択の1つになるようなメジャーな産業にしていきたいという思いで、ちょっとかなり大きな目的なんですけれども、林業大学校に入学して1年目でこのような団体を設立いたしました。

では、これまで林業女子会@しなのがどのような活動をしてきたのかをご紹介します。

まず一番最初に行った活動がワークショップです。林業女子会@しなのとして、これからどういう活動をしていきたいのか、森や木が好きの人を増やすにはどうすればいいかななどを付箋に貼り出して、何回も話し合いました。その結果、「山と暮らしをつなげよう」を軸として活動していこうということに決まりました。

今、長野県には山がたくさんあるにもかかわらず、どうしても私はなぜか遠いような存在に感じてしまいます。有名な山々はたくさんあるのですが、私たちに一番身近な日々の暮らしとはあまり、今、私の現状で言えば接点がないように感じます。そこで、林業女子会@しなのとして、山と暮らしをつなげる活動を行い、もっと山を身近に感じてもらい関心を持ってもらおうという運びになりました。

また林業女子会@しなのは、感謝してもしきれないほど、いろいろな方々に支えていただいています。隣の地域で大変恐縮なんですけれども、設立してから1年後の平成27年5月23日には、塩尻市と林業女子会@しなのとで連携協定を結ばせていただきまして、ともに協力しながら林業を盛り上げていこう、全面的にバックアップするという温かい言葉を塩尻市長さんからいただくことができました。そして、さまざまなイベントにも声をかけていただきまして、木の魅力を、木のある暮らしの魅力を発信していきました。

左側の写真は、10月4日に行われた環境・生活・健康の分野に関する関心と理解を深

めるためのイベント、e-lifeフェアにて、薪割りのデモンストレーションを行っている写真です。また、右側のチラシにもございますが、木育について考える全国木育サミットのスタッフとして、このイベントにも参加させていただく機会をいただきました。

昨年11月14日から15日にかけて開催された木育フェスティバルでは、林業女子会@しなのと林業大学校と共同で、山に落ちてあるいろいろな形の枝を使って、世界に一つだけの、自分だけのえんぴつをつくろうというワークショップを行いました。えんぴつをつくった後は、つくりたてほやほやのえんぴつで、大きな模造紙を用意しまして、それぞれが思う森を思い思いに描いてもらいました。このイベントでは、幼稚園児から小学校高学年の約50人以上の方々に来ていただきまして、大盛況の中、イベントを終えることができました。

イベントだけではなく、森づくり、森林整備も定期的に林業女子会@しなのは行っております。塩尻市の市有林をお借りすることができ、現在、その森を林業女子会@しなののメンバーと、地元の方々とともに整備を進めています。休みの日には、人生の大先輩から山づくりや山の活用方法などを教わることができ、私にとってはこのひとときは、すごく幸せなひとときです。伐採した木は塩尻にある薪ステーションに持っていったり、しいたけやなめこを植菌したりしました。

休憩時には、みんなで地べたに座って、それぞれ持ち寄った食べ物や飲み物をいただきながら、昔はこうやって山で遊んだのだ、今、山がマツタケがたらふく生えているから取りに来いだの、素敵なお話を聞くことができます。なので、これもまた幸せなひとときです。先人たちは、山をどのように活用してきたのか、山を暮らしに取り入れる知恵を今後も実践しながら学んでいきたいと思っています。

これは余談になりますが、昨年、切ってほしい木があるとメンバーの一人から依頼を受けて、現場で働いている女性と現場志望で当時学生だった女子生徒と、私の3人で伐倒作業を行ったことがあります。その作業を通して、現場で働いている方から女性がやりやすい木の伐倒方法について教えていただける支援がありました。大変申しわけないんですけども、せっかく教わったんですが、ちょっとど忘れしてしまいまして、具体的なやり方というのが今ここで明確には説明できないんですけども、男性が多い林業界で、現場で働いている女性同士の交流の大切さというのを感じた瞬間でもありました。

次に、山と暮らしをつなげるための、山に関心を持ってもらうための今後の展望についてお話をさせていただきます。

@しなののメンバーが森や山、そして林業に興味を持った大きな一つの要因が原体験です。小さいころに山の中を走り回っていたとか、木のおもちゃでずっと遊んでいて、気がついたら木が大好きになっていたとか、そういった人、幼少期の原体験がメンバーそれぞれの今の生き方に大きく影響しています。10年後、20年後、森を愛する人がもっと増えてほしいという思いから、未来の大人である子どもたちを対象に、森の中で思いっきり遊ぶイベントや、ものづくりのワークショップを開催しようと現在計画中です。

2つ目ですが、子どもに森や木の魅力を伝えるには、まず大人が森や木の魅力を知ってもらうことが必要だと私は思います。私がそうであるように、子どもは親の影響を大きく受けると思うからです。

そこで林業女子会@しなのとして、簡単にできる山を取り入れた暮らしを実践、提案しながら、その魅力を広めていきたいと思います。具体的な例をこれから3つ挙げさせていただきます。

1つ目は、インテリアとしての活用です。昨年、私は東京で行われた国産杉葉とミモザ、右側にある黄色い花ですね、をあわせてスワッグをつくろうというワークショップに参加してきました。スワッグとはヨーロッパなどでインテリアとして親しまれている壁かけのことです。

このワークショップの参加者は、主に20代から40代の主婦の方々だったのですが、杉の葉っぱをこんなにかわいいとは知らなかった。花屋さんに売っていたら買いたいなどの意見がバンバン出てきました。これは杉の葉だけでなく、ヒノキなどでも代用できると私は思っています。また、スワッグだけではなく、さまざまな形で山にあるものをインテリアとして取り入れることができると思います。左上の写真は、ますの中に入った杉玉です。杉の葉がかわいらしい、愛らしい形で部屋を彩っています。

また、近年、苔がブームになっているようで、苔玉や瓶に苔を入れたテラリウムなどのインテリアとして、すごく人気が高いです。おしゃれな雑貨屋さんなどではとても高い値段で販売されていたりします。ですが、山に入って苔と植物を採ってくれば、自分好みのものをつくることができます。

2つ目は、アロマなどの香りを楽しむ癒しグッズとしての活用です。実は今日、緊張であまり寝つけなかったため、家にあるアロマで、フューザーで精神統一をしてきました。アロマは幅広い年齢層の女性に人気があり、雑貨屋さんなどではさまざまな香りのアロマオイルなどが販売されています。アロマオイルなど、蒸留しなければいけないものは個人でつくるのは大変難しいですが、アルコールにハーブをつけたハーブチンキなどは簡単につくることができます。山に生えているハーブを摘んできてお酒につけるだけで、入浴剤としての活用や虫除けなど、幅広い活用方法があります。また、ヒノキのかんなくずをお酒につけるだけでも、万能アロマとして暮らしの中に取り入れることができます。

3つ目は山の恵み、食べ物です。春にとれる山菜、秋のきのこや、もうすぐ終わりの季節が近づいていますが、ほお葉巻きなども山の恵みの食べ物です。

今は3つしか例を挙げませんが、このように木材のみならず、さまざまな方法で山を暮らしに取り入れることができると思います。

すみません、今日突然、プレゼンテーションを差しかえてしまったので、この後の資料がちょっとないかと思うんですけれども、つい先日チラッと読んだ本について、私が大きな影響を受けたので、その言葉を紹介させていただきたいと思います。

森が死ぬ本当の原因は、私たちが日常生活にはもう木など必要ではないと考えること、無関心になることです。森が最もうまく扱われるのは、木材が人間の生活の中で重要な役割を果たすとき、木材と上手につき合える職人がいるとき、私たち人間が森や木材を恵みとして受け入れるとき、森林を守るということは、森の恵みをありがたく受け入れて、それを有意義に活用することほかなりません。これが「木とつき合う智慧」という本で、エルヴィン・トーマさんという方が書いた本になります。

昔は里山の暮らしがあり、山の恵みを取り入れた生活が送られてきました。しかし、技術の進歩とともにどんどん暮らしが便利になり、いつしか暮らしの中から山が消えてしまっているように感じます。ですが、山はとても豊かな資源に満ち溢れています。今の時代だからこそできる、山を取り入れた暮らしを新しく提案していく必要があると私は感じます。

まとめになりますが、山と関わる機会を間接的にでも増やしていき、より多くの人に山・森・木について興味を持ってもらい、長野県が自然の豊かさを再認識することで山に興味を持つ人が増え、さまざまな角度から林業が生まれ変わっていくのではないかと私は考えます。そして山が身近にある暮らしの実践、提案をしながら、林業女子会@しなのとしてもネットワークも広げていきたいです。

先人たちが長年受け継いできた山とともに歩んできた暮らし、しかし、今の暮らしは山と離れてしまっているのではないかと感じています。私は昔の生き方にはこれからの暮らしのヒントがたくさん詰まっていると感じています。これは私自身にも言えることではありますが、山への感謝の気持ち、畏敬の念を忘れずに今後の生き方、木とのかかわり方を模索していきたいです。

まだまだ未熟者ですが、いろいろ学んでいきたいと思っていますので、今後ともご指導のほどよろしくお願ひします。ご清聴ありがとうございました。

【赤堀楠雄氏】

榎本さん、ありがとうございました。では最後に鈴木さん、お願いします。

【株式会社 Tree to Green 鈴木潤吾氏】

こんにちは。Tree to Greenの鈴木と申します。よろしくお願ひします。

簡単に経歴を紹介させていただきます。大学、大学院と理系の大学を卒業しまして、こちらでは機械工学を専攻していました。大学院の卒業後にホンダに入社しまして、四輪の生産に携わってきました。そして去年の4月に、ここ上松にある上松技専に入校し、今年の4月より、Tree to Greenという会社で働いています。

機械工学とホンダと来て、鉄を主に扱っていたので、鉄から木へと大きく変えたねと言われることがよくあるんですけども、自分としてはそうではないということをお話させていただければなと思います。

そもそもホンダに入社した動機としましては、環境車の普及による環境負荷のゼロ化、また自動車主導によるエネルギーシフトというものを目指してホンダに入っていました。特に環境車の普及による自然への貢献、燃料電池自動車を普及することによって将来的な環境負荷をゼロ化する。環境は持続可能にするということを目指して働いていました。

でも、そのときに気づいたことがあります。燃料電池自動車が普及するまでにはかなりの時間を有します。その普及に至るまでに発生した自然への影響はどうなるのだろうか、負荷がなくなったときに自然はまだ豊かなのか、持続可能なのか、そのとき、自分は日本の自然の現状を知らないなということに気づきました。なので、自分なりにいろいろ勉強してみた結果、わかったこと、それは日本の森は儲からない。それはわかりました。昔は儲かっていたけれども、今は儲からないから森が放置されている。その結果、森の荒廃は進んでいる。そんな森が日本のあらゆるところにあると知りました。

なので、フォーラムなどに参加していろいろな意見を聞いたときに、ある質問をしているおばあちゃんが印象的でした。そのおばあちゃんは、すごい切羽詰った表情で、森を受け継いだけど、この森をどうすればいいかわからない。そんなことを聞いていました。それを聞いたときに気づきました。森に対する危機感、それはすぐそこにあるんだなということに、自分は初めて知ることができました。

なので、もう将来の森を守るのではなくて、今の森を守る。それが必要なんじゃないかなと思い、森の木のサイクルに実際、身を投じること、それが今、自分ができることじゃないかなと思いました。

どうやって木のサイクルの中で貢献するか、それを考えたときに、儲からないのであれば木を使うことで経済的出口を広げる。つまり木で儲ければいいのではないかと思いました。どう儲けるか、それを考えたときに、自分にできることはつくることです。つくるのが好きだったからホンダというメーカーに入りました。でも、木で何かをつくることは自分はそのときはできません。では、することは簡単です。気を使う技術を身につければいいと思いました。どうやって身につければいいか、それはもうここ上松技術専門校に通うことで、身につけようと思いました。これは去年1年間で製作させていただいた製品です。ド素人でも1年間でこれだけのものができるようになりました。とても充実した技術を学ぶことができました。

そして技術を学ぶ中で、また気づいたことが一つあります。それはつくる行為そのものにも価値があるんだなと思いました。技術を学んでいく中で木の本当の良さ、それを知ることができました。加工していく中で感じる木の手触りであったり、香り、そんなすばらしさ、それを実感することができました。つまり技術の価値を知り、素材の魅力を知ることができた。これは学んできた中で得たすごく大切なことだと思います。

また学生生活の中で得たもの、それはほかにもありました。それはこの木曾でさまざまな人と出会えたことです。本当は木曾に来たら、その卒業後はまた違う地域に行こうと思っていたんですけど、この木曾でさまざまな人と触れ合うことができ、その人

の温かさに触れこの木曾でいろいろやっていきたいというふうな、活動したい、そういうふうになることになりました。さまざまな人との出会い、その中で考えたこと、それは多様な人とともに行うものづくり、木材の加工技術、その価値を多様な人と共有することが木の価値を知ってもらう、ひいては森の価値、そんなものをいろいろな人に知ってもらう、そんな一手になるのではないかと思います。

そのようないろいろな木曾との出会いの中で、Tree to Greenという会社との出会いがありました。自分の思いと会社の思い、その双方に共感をしていただき、この会社で働いています。Tree to Greenとは、日本の木とその文化から新たな商品、サービスをつくり、お客様の快適で生き生きとした暮らしをつくること、これを目標としています。つまり日本の木の文化、それを世界に発信し、木とともにある暮らし、それをつくるのが目的です。

Tree to Greenの事業は全て何かをつくることです。まずものづくりです。この木曾生活研究所という事業は、木曾町から木工信託事業を受託し、東京のデザイナーがデザインした商品を木曾の職人さんがつくっています。ただ、その木曾の職人さんはかなりの高齢で、もう技術がなくなる寸前です。その技術を絶やさないために、自分はその職人さんのもとで技術を学び、木曾の製品をつくり続けています。その製品は海外へと展開することで世界に発信していきます。ニューヨークやドイツの展示会への参加や、こちらはドイツのデザイナーがデザインした製品を木曾の職人さんがつくっています。最近ではシンガポールのデザイナーともコラボレーションをし、世界へと文化を発信しています。その目的は日本の木の文化、その木の文化の良さを世界に発信することです。

次につくっているもの、それは空間です。都内を中心に飲食店やオフィスなどの内装を木質化することによって木と触れ合う、その場所をつくっています。その空間の中でも特に大事にしている場所、それは子どもがいる場所です。この写真は都内の保育園で施工した内装になります。どんな場所であっても、子どもが木と触れ合うぬくもりの中で育てほしい、そんな思いから保育園などの木質化を進めています。

また、長野県の信濃町の子育てスペースを監修：日本グッド・トイ、デザイン設計：Tree to Greenで施工させていただきました。北は北海道から沖縄まで、全国に子どもたちが木で遊べるスペース、そんな場所をつくっています。

最後につくっていること、それは木と触れ合う機会そのものです。これは都内で行ったワークショップですが、このワークショップでは園児とともに先生向けにワークショップを行いました。子どもに魅力を伝えるのは大人ですので、その大人にも木と触れ合う機会をつくっています。また、東京の奥多摩では、由緒ある古民家の再生を委託され、その古民家で木と触れ合う文化、その地域が育んできた文化を体験する、そんな茶屋をつくっています。こちらは来月オープンする予定です。

また、木育を広めるウッドスタートを木育推進委員として全国に展開しています。ウッドスタートとは、木を真ん中に置いた子育て・子育て環境を整備し、子どもを初めと

する、全ての人が木へのぬくもりを感じながら楽しく豊かに暮らしを送ることができるようにする、そんな運動です。

その運動の中で、地元の木を使い、地元の職人さんがつくったおもちゃを新生児に贈るというプログラムがあり、木曽では大桑村が今年3月、木曽町では来月8月に参画する予定です。今現在、木曽町の子どもに配るおもちゃを職人さんと自分で頑張っつけています。

Tree to Greenが行っていること、それは木の製品をつくり、木と触れ合う場所をつくり、木と触れ合う機会をつくること、それによって木の魅力を広め、木の需要そのものを開拓することです。そして私が行っているもの、それは、まずは木曽地域の木工技術の継承を行っています。技術は絶やしてはならないものだと思います。技術がなくなつたときに、それを取り戻すことはできません。

また、Tree to Greenという会社は東京に本社を置いている会社ですが、自分はこの木曽に住んで、木曽で地域で生業をつくっていかうとしています。また、ここの木曽で活動するに当たっては木曽町からも援助をいただいております、民間と町で共同して地域で生業をつくっていく、そんな新しいモデルケースになるのではないかとこのように思っています。

最後に、個人的な話をさせていただきますと、この4月から木曽町に住んでいるのですが、とてもいろいろなご縁があって、取り壊される寸前だった元公民館、木造の公民館を自分の家としてお借りすることができました。中に石垣があるようなすごい素敵な物件なんですけれども、公民館だけあって、一つ問題がありまして、それはお風呂が無いことです。なので、無いのであればつくってしまえばいいということで、自分で学んだ技術を生かしてヒノキ風呂をつくりました。お風呂問題は近所の方も気にしてくださるので、どうしているのというふうによく聞いてくださるので、今、工事中なんですけれども、工事が済んだら地元のおじいちゃん、おばあちゃんに入っていただくような風呂開きをしたいなと思っています。

またおもしろい家なので、いろいろな方が遊びに来てくれます。例えばフランスから来てくれたり、台湾からも来てくれたり、いろいろな方が遊びに来てくれます。東京の大学の教授であったり、愛知の教授も遊びに来てくれました。なので、この家ではそういう人たちが気軽に泊まり、そしてものづくりができるような、そんなゲストハウスをつくりたいと思っています。

この場所で、何かおじいちゃんに椅子をプレゼントしたいんだというような思いを持った人が来たら、その思いをみんなで形にするような、そんな場所をつくりたいなと思っています。イノベーションは初心者が起こします。もしかしたら、ここからイノベーションが起こるかもしれません。

最後に、自分が大切にしている思いを少し話させていただきたいと思います。それは評価は結果論でしか語れないということです。今やっていることがいいことなのか、悪

いことなのか、それは将来になってみないとわからないと思います。なので、今、大切なこと、それは未来の為に考え、未来の為に行動する、それしか今はできないのではないかなと思います。ではそのためには、あるべき未来で夢見ること、それこそが大事だと思います。

では、自分にとってあるべき未来、それは未来永劫、経済サイクルが持続する森ではありません。今、人が森を経済という物差しで測り、定量的な観点で森をつくり変えてきたと思います。森で稼ぐ、それは今の森にとって大切なことだと思います。今、問題になっているのは、人がつくり変えてきた森、それが稼げなくなってきたからこそ、問題になっているのではないかと思います。

逆に森の立場に立って考えてみたら、人間が押し当てた経済的価値の尺度というものは、自然にとってみたら意味がないのではないかというふうに思います。これは自分がとても尊敬している自然学者、アルド・レオポルトが語っていた言葉なんですけれども、「人が客観的に見て明らかに優れている点、それは他の種の痛みを悲しむ事ができる点である」ということです。人は共感できる生き物だと思います。自然や動物の立場に立って物を考えることができる、それが一番の人の美德だと思っています。

大事なことは自然への共感、愛情を育むこと、これこそが一番大事なことだと思います。なので、自分の考えであるべき未来、それは未来永劫、多様な生命の営みが持続する森、これがあるべき未来なんじゃないかなと思っています。そのために、今、できることをしていきます。それがたとえ自己満足であってもいいと思います。未来のために考え行動した結果、どんな行動ができとしてもそれでいいと思っています。

以上になります。ご清聴ありがとうございました。

【赤堀楠雄氏】

どうもありがとうございました。3人の方にご発表をいただきまして、とてもテーマがたくさんある良い発表だったと思います。

知事、3名の発表をお聞きになりまして、まずどういった、ご感想も含めてコメントいただければと思うんですが、いかがでしょう。

【長野県知事 阿部守一】

3人の皆さん、どうもありがとうございました。お疲れさまでした。

ちょっと、あまりにも話が広いからコメントしづらいなと、一言でちょっと言えないなと思っているんですけども、ちょっとまた赤堀さんにも手伝ってもらって、ちょっと話を深めていったほうがいいと思うんですけども。

まず、今井さんが話してくれた中で、最後の苦労話とか、かなり本音の話で語ってもらえて、やっぱり例えば林業に本当に若者が就職したくなる、林業で、俺、頑張るぞというふうに思えるような林業に変えていかなければいけないということだと思うんです

よね。そこは少し問題提起してもらえたんじゃないかと思うので、ぜひそこはしっかり受けとめたいと思います。

多分、最後にかっこいい林業という話があったので、このかっこいいというのは多分いろいろな意味があると思うんですけども、やっぱりやっばりやっばり誇れる仕事、単に見た目の問題だけでは多分ないと思うのです。こんなすごいものをつくっているんだとか、こんなやりがいのある仕事だとか、ただ、誇れる仕事によりしていくには、どんなことが必要なのかということをお皆さんで考えていかなければいけないだろうというふうに思います。

その中では、例えば、森林組合で働いてもらっているんですけども、私たち、今、長野県は大北森林組合の補助金の不正受給の話があって、これは大北森林組合の元役員に極めて問題行動があったということが原因ではあるけれども、私は、実は森林組合のあり方自体をしっかり考えていかなければいけない時期に来ているんじゃないかなというふうに実は思っています。ここら辺はぜひちょっと森林、林業関係者の皆さんのご意見を聞きたいと思うんですけども。

森林組合、補助金を受けて森林整備をやっていくということが基本的な仕事の生業になっているんですけども。今日、少し森林について非常に幅広い話が出ていたように、多分、森林の価値というのは、材を生産するというに関連して、あるいはそれだけではなくて、多分いろいろな価値があるので、もう少しそういうことも、森林組合だったり、我々行政としての林業行政も見ていかなければいけないのではないかなというふうに思っています。そこら辺をちょっとまた少し深めていただければと思います。

それから、榎本さんの話で、ちょっとこれは山と暮らしをつなげようということで取り組んでいてもらっているんですけども、私は、長野県から木と森の文化を発信したいなと思っていて、木と森の文化。冒頭、言ったように、どっぷり森と一緒に暮らしているのが我々長野県民だというふうに思っているんですけども、ただ、最後に出てきたように、だんだん実は長野県に暮らしていても、森との関係性を意識しないことが増えてきているんじゃないかと。あるいは無関心になることがいけないというふうに問題提起してもらいましたけれども、私は自分の家で薪ストーブを使っているんで、その薪ストーブの薪を燃やすときは、やっぱり当然のことながら、木とか森のことは当然頭に置かなければいけないんですけども、スイッチを押せば電気が来るし、暖房も電気とかガスとかでやるようになれば、ほとんど普通に暮らしていると、木とか森のことは全く意識しなくても暮らせる暮らし方が広がってきているというふうに思っています。

そういう意味で、多分、意識的に森とか木のことを考えないと、だんだん疎遠になって、そういう中で最初は赤堀さんが問題提起していただいたように、本当に林業というのは必要なのかとか、あるいはもっと極論すれば、我々にとって森が本当に大事なのかというような意見が出てくる世の中になってしまっているんだろうなというふうに思います。

そういう意味で無関心社会、木と森に対して無関心になっている社会に対して、我々森林県長野県として何を発信していくんだと、どう問いかけていくのかということが多分重要で、そこが問題提起をしていただいた部分なのかなというふうに、勝手に解釈をしていますし、そうした活動をぜひちょっと具体的にいろいろ考えなければいけないと思います。

県としても例えば、去年から信州型自然保育の認定制度で「信州やまほいく」ということで、これ都道府県で初めてそういう制度をつくったんですが、私は、NPOの人たちが自然保育をやり始めて、だけど、ほとんど公の認知度があまり広がらないし、とはいえ、自然の中で子どもを育てたいという人たちが非常に増えている状況で、今のままではいけないなということで過度に介入をしない程度に、とはいえ、やっぱりこういうルールとか基準に当てはまっているところはこれだけありますということで認定制度をつくったんです。

長野県の子どもは元は、山とか、川とか、森で遊びながら成長していったと思うんですけども、だんだんそういう環境ではなくなりつつあるので、やっぱり意識的に戻さなければいけないなという思いもあって、いわゆる信州型自然保育の認定制度「信州やまほいく」と言っていますけれども、そういう制度をつくりました。

それから観光でも、アウトドアを観光の柱にしていきたいと思っていますけれども、アウトドアもいわゆる動的なカヌーとか、サイクリングとか、動的なアクティビティだけではなくて、もう少し静的な例えば星空ツアーとか、あるいは露天風呂みたいなものもアウトドアといえばアウトドアなので、やっぱりもう少し、そういう静かな部分のアウトドアも含めてアウトドア県にしていきたいと思っています。その中でもやっぱり重要な役割を果たしているのは森、山だと思うので、少し、この最後の方に出てきている食べ物の話だとかアロマの話だとかというのは、観光とも非常に関連が深いので、そういう方向で発展をさせていければいいのかなというふうに思っています。

榎本さんの話と、それから鈴木さんの話で、ちょっとイメージ的に榎本さんはおっしゃらなかったかもしれないんですけども、私が共通しているなと思ったのは金銭では換算できない価値があるという話だと思っていて、私は長野県の知事をやっていて、いろいろなところでいろいろ話をする機会と言うことの一つに、長野県はお金で換算できない価値がいっぱいありますと言っています。都会の価値というのはほとんどお金で買える価値が多いと私は思っているんですけども、長野県はお金で換算できない価値がいっぱいあるなというふうに思っています。

さっきの星空もそうだけれども、星空なんかほとんどタダ、あるいはこの間、志賀高原で市川海老蔵さんが、毎年「ABMORI (エビモリ)」と称して植樹をやってもらっているんですけども。そのときに、私、あいさつのときに言ったのが、皆さん息を吸ってくださいと、来ている人に。いつも吸っている空気と違うでしょうということを最初に言ったんですけども、全くタダですよ、空気は。全くタダ。全くタダだけれども、

多分、その志賀高原の空気だとか木曽の空気は東京では吸えない、まして中国では吸えない。中国の人たちにとってみれば、高いお金を払ってでも買いたい価値ではあるんだけれども、我々にとっては金銭的には基本的には無価値です。

ただ、どうしても今の社会というのは金銭換算できるもの、例えばGDPが幾ら上がったかということばかり気にし過ぎる傾向があるけれども、多分、それだけでは測れない価値が実は本当の人間らしい暮らしにとっては大事だと思うので、そこのところをやっぱりもう一回、見つめ直さなければいけないと。

ただ、それだけだと、この業の、林業の業の生業、あるいは営みの話にはつながっていかないの、実は私は長野県は金銭で換算できない価値がいっぱいありますということとともに、金銭で換算できないものも、金銭に換算できるようにできないかを模索しないといけないんじゃないかと言っていて、それは、さっきのおいしい空気の話だって、例えば中国の人たちにPRすれば、それは観光にもつながるし、あるいは、木材でも使われないような、加工品としては活用できないようなものもエネルギーとして使えば立派な自然エネルギーとしての活用ができたりするので、そういう意味では、私、温故知新と言っていたのがすごく大事だと思いますし、昔のことから我々は学ぶべきことがいっぱいあると思うんですけれども、それと同時に、やっぱり今の社会が置かれた状況の中で、実はもう一回、使えるものがいっぱいあるのではないかと、もう一回、金銭に換算できるものがいっぱいあるのではないかと、そういうことを考えていかなければいけないんだろうなというふうに思います。

それから、ちょっと長くなってはいけないので、あと鈴木さんの話の中で、一番、金銭価値のところでは私はこだわっているんですけれども。

ちょっとこれ、Tree to Greenという会社がどういうことをやっているか、まだよくわからないところがありますけれども、鈴木さんは木曽に住んでいらっしゃるんですけれども、ぜひ会社ごと丸ごと長野県に来てもらえないかなというふうに思いながら、話を聞いていました。この価値観と合うのは、東京都世田谷区池尻で私は絶対ないと思っていて、木曽郡上松町か、あるいは木曽郡木曽町か、あるいはどこでもいいですけれども、少なくとも信州の方がこの企業のコンセプトには絶対合っていると思いますので、ぜひそういうことを考えてもらえればありがたいなというふうに思っています。

ちょっといろいろ幅広かったので、ちょっとあっち行ったりこっち行ったりですみませんでしたけれども、コメントさせていただきました。ありがとうございました。

5 意見交換

【赤堀楠雄氏】

ありがとうございました。ここから今日のまさに本番とも言える、皆さんとディスカッションをやりたいんですけれども。

今、知事からもご指摘あったように、社会的には森林や林業に対して無関心層が増えているという、そのあたりにも一つの、今回、今日のテーマかなと思うんですが。実は今日、ちょっと議論を進めるに当たって少し準備していたことがありまして、今日、お手元の資料の中に三色のカードがあるでちょっと手にとっていただきたいんですが。

我々この白のテーブルで議論するだけではなくて、会場の方々の、これから御発言もいただきますけれども、全体的なお考えなんかも把握しながらちょっとやっていきたいと思って、僕、こういったファシリテーションをやるときにたまにやらせていただくんですけれども、旗上げ世論調査方式というのをちょっとやってみたいと思います。

三択の質問をちょっと皆さんにお示しして、で、お手元にあるのが水色とピンクと黄色のカードがあるかと思うんですけれども、ご自分のその選んだ答えをそのカードでパッと上げていただくと。つまり順番に聞くと、ちょっと周りの表情を見たりしてしまうので、一気に上げていただいて会場を色分けして、どういう会場の考えがあるのかということ全員で共通認識として把握した上で議論するという、そういうやり方なんですけれども、ちょっと練習したいと思います。

ちょっと自分の年齢を答えたくないという方は答えなくていいんですけれども、ちょっと今日、どういう方々がいらしているかということも含めての練習なんですけれども。色はあれですけれども、一番上は水色です。30代の方が水色、40代・50代の方がピンク、60代以上の方が黄色ということで、こういう形でパッと上げていただいて会場を色分けするという事なんですけれども。よろしいですか、ちょっとご自分の年齢で、答えたくないという方は上げなくてもいいんですが、では皆さんのちょっと年代を教えてくださいたいと思います。ではお願いします。はいどうぞ。

今、集計係がざっくりと・・・なるほど、わかりました。30代の方と40・50代が多いということですね、結構若手が多いということですね。まあここは、こういう状況で、ではここからちょっと、案外、今日、若手の方がいらっやっていて、先ほど知事からお話があった、林業を本当に魅力ある職場としてこれから考えていくのにどうなのかということの意見をまずいただきたいと思いますけれども。

次の質問から本番なんですけど、今、はからずも知事からのご指摘のあったことで、では今日は上松に来ているのでよもやとは思いますが、林業というのは森林に置きかえて考えていただいても結構です。「森林・林業はあなたにとって身近に感じるものでしょうか」と、それをちょっとお聞かせいただきたいんですけれども。感じる、身近なんだという方はブルー、いや、別に今、身近に感じない、正直に答えていただいて、その方はピンク、それはちょっと何とも言えないなという方は黄色で、ちょっと皆さんがどういうふうを考えていらっやるかをお聞きしたいと思います。はい、お願いします。

ちょっと、大体もうあれですね。ほとんど青で、何とも言えないという方がいらっやるんですけれども。ちょっと一人だけピンクなんで、聞いていいですか。その心は。

【男性A】

僕にとって、森とか森林というのは窓の外の風景みたいなもので、直接的にかかわりのない存在という印象があります。今は上松のほうに住んでいるんですけども、出身は和歌山の、関西のほうで。身近に山というのはそんなに、住んでいるところは町だったのでなかったんですけども。

【赤堀楠雄氏】

ありがとうございました。土地柄、ブルーがもう圧倒的だったんですけども、やっぱりこれは都会に行ったらガーッと答えが変わってくる、今、お答えになった方が別に特別なわけではなくて、そういう状況の中でこれから森林・林業の未来を考えていかなければいけないという、先ほど知事のそのご提言も同じことだと思うんですけども。

そのあたり、今日は3人の方のご発表も、もうそれぞれそういう今の森林・林業が身近かどうかということに関係したこともあったので。ここから皆さんから、今の、これまでのプレゼンへの質問でもご意見でも結構ですけども、ちょっと、今、こういう状況下で議論を深めていくということで、これから林業や森林をもっと身近にしていくためにという問題意識でちょっとご意見や、あるいは今までの発表に対するご質問がおありの方があれば伺いたいんですけども、いかがですか、どんなことでも結構ですけども。あるいは、もし会場でなければ、今、3人の方も含めて、ちょっとこんなことをもう少し聞いてみたいということがあれば、どうですか、特別ないですか。

ちょっと僕、今井さんに、あなたはこれからもっと林業を身近なものにしていきたいというお考えがあるということもおっしゃっていましたが、今、実際、仕事を自分がしていて、お友達とか同世代の方々がこの地域にはいっぱいいると思うんですけども、その方々が、同世代の人たちが、この地域の森林や林業に対して向けてる目というのはどういうふうに感じていらっしゃるでしょうか、生粋の地元の人間として。

【今井竜太氏】

何とも言いにくいんですが、同期では今、5人ほど林業に就いてしまっているので、その職業に就いてない人も上松の良さとか、この木曽の大自然の良さをわかってはいるとは思うんですけども・・・ちょっと、何とも言えない、難しいですね。

【赤堀楠雄氏】

それは、必ずしもいいと思っていることと、本当に身近に実感として持っているところというのは、なかなか一致しない部分もあるかもしれないということですかね。

もうご自身がこの仕事をやって・・・ちょっと僕、さっき聞いてみたかったんですけども、3年間怒鳴られながら、今、何とか仕事できるようになったということで、ご自分の山師、林業をやってこれから、どんどん発信もしていきたいという、自分の目標

とする林業者としての姿からすると、今、ご自分は何人前ぐらい、パーセントで言ったら。

【今井竜太氏】

パーセントで言ったら・・・20%か10%の間ぐらいですね。

【赤堀楠雄氏】

今、5年間やっているんですね。

【今井竜太氏】

はい、まだちょっと、自分では満足できない部分が多々あるので。

【赤堀楠雄氏】

今日、若い方いらっしゃって、林大の方々もいらっしゃるんですね。実際にその山仕事をやってみたいという、そういう希望を持っているという人はいませんか、これから。

では、その立場からもうちょっと何か質問とか聞いて、言いたいことがあったら伺いたいんですが、どうでしょう。どんなことでも。

【男性B】

質問なんですけど、仕事をしている中で、もっと効率化できるようなことがあるって感じたことはありますか。

【今井竜太氏】

林業の中にもいろいろな仕事があるので、効率化と言われるといろいろなことがあるんですけども。高性能林業機械を使うというのと、あと、そうですね、特殊伐採をやっているの、今、かんじきと安全帯だけで登ったりはしていますけれども、やっぱりヨーロッパとか外国のほうからツリークライミングも入ってきているということで、安全性と効率の両方が本当は理想ですけども。今の現状で言うと、やっぱり日本はちょっと、道具にしる、ちょっと考え方もやっぱり違う部分があるので。

そうですね。今、自分が思っている林業で効率的な林業というのは、そうですね、高性能林業機械なり外国のいい文化を取り入れるというのがいいかなとは思っています。また、その効率だけを追い求めてしまうと、どうしてもいいこともあれば悪いことも出てくるので、またそこも難しいことだと考えています。

【赤堀楠雄氏】

長野県はオーストリアと具体的に提携もしながらいろいろな、これから林業の施策を

という形で伺っていますけれども、今、彼から外国のことなんかも参考にしながらというお話があったんですけれども、今、実際にこの間、去年でしたか、オーストリアのセミナーもあって、これからさまざまな展開が図られると。確か林大の2年生、今、向こうに行ったりしているかと思うんですけれども。

知事どうでしょう、これから長野県の人材育成ということも含めて、海外のこと、オーストリアの具体的なそのことなんかも参考にしながら、どんな形でその林業の担い手というのを育成していくのかという観点からは。

【長野県知事 阿部守一】

そうですね。今、お話いただいたように、オーストリアの林業を学ぼうということで、オーストリア政府と我々長野県とで覚書を結んで、林業大学校、榎本さん行きましたか、オーストリア、林業大学校の生徒の交流とか、技術面での交流はかなり深めてきているところです。

さっきも今井さんの話にもあったように、高性能林業機械の導入とか、かなり生産性で、一つの指標だけで見えてはいけないうちかもしれないんですけれども、相当差があるのは事実で、そこをどうしていくのかということが、日本の林業のこれからにとっては多分、一つ重要な話なんだろうなというふうに思いますし、さっき今井さんが若干言いづらそうに本音で語ってくれたことは非常に重要だろうとあっていて、多分、やっぱり林業だけではなくて、最初入ると、今の日本の社会というのは、何というか、昔の日本の社会というのか、昔は結構、徒弟制的な話で自分で学べと。今は、昔のほうが多分人口が多かったし、実はいろいろなところで遊びとか余裕があったけれども、今はどんどん、どこの企業でも人が少なくなってしまったので、だんだん人材を育てる余裕自体が組織としてなくなってきているので、そこをどうするかということがかなり大きなテーマだと思います。これは林業に限らず。

林業については、フォレストコンダクターの育成をはじめとして、県もやっぱり人材育成をちゃんとやっていかなければいけないなというふうに思っていますし、これちょっと林業大学校の生徒が大勢いるので、林業大学校、もっとこうすべきということがあれば、榎本さんも含めて、ちょっと提案してもらいたいと。多分、そこの人づくりのところはどれだけ、これは行政としてできる部分はどれだけ、今の時代に合った人材をつくれるかということが、一つ、行政の大きな役割だなというふうに思っています。

【赤堀楠雄氏】

実際、どうですか。その林大の卒業生の立場でもあるし、これからの将来を担うという立場、具体的に何か提案があれば、榎本さん。

【榎本浩実氏】

私は先ほどの発表もあったように、昔から受け継がれてきた、その知恵とかというのにすごい趣を感じる人間なので、それが産業として生業として効率的に、お金になるかどうかという問題は別として、精神論みたいなものにすごく、魅力といたらあれで、心が揺さぶられるような感覚になるので、効率を追い求めながらも、昔から日本ではどういったお仕事が、山と人がどういうふうなかかわりで今までやってきたのかということも重きを置いて勉強をしていくと、さらに視野が広がるのではないかなというのを、私は感じます。

林業大学校では、実際に座学という形式で教わったりとかはするんですけども、人のところに行って話を聞くとか、そういった経験というのはあまりしてこなかったのかなとも思うので、実際に、その、何というんですか、本当にずっとそこで生業としてきた、人数が少ないかもしれないんですけども、そのところに行って話を聞く機会をもう少し多く設けていただいてもいいんじゃないかなということは、学生時代から思っていました。

【赤堀楠雄氏】

古い技術とか伝統というのは、今も生きていると思ったほうがいいと思うんです。例えば高性能林業機械で丸太をこう自在に操れるといっても、機械は力があるから操れますけれども、実際に昔の道具でとびとかあるじゃないですか。あれで重心がわかってやっている人たちが機械を持つと明らかに違いますよね。機械だから力任せに動かしてしまっても、実は機械を使っても、昔と同じようにその木の重心がどこにあるかわかって使ったほうが、格段に作業の効率が上がる。だから、手作業の延長で持っていた技術というのは、必ず今に生かせるというのがあるとは思うんですよね。

会場からでも結構です。何かこういう提案があるとか、意見があるという方はいませんか。人材育成、はい。

【長野県木曽地方事務所 林務課長 松原秀幸】

木曽地方事務所、林務課長の松原秀幸と申します。ごあいさつが大変遅くなりましたけれども。

私も木祖村のここで生まれて、この仕事も、ずっととはいきませんけれども、木曽にこだわって、木曽で林業の仕事をしてまいりました。

この山で働く人の話をさせてもらいますと、木曽には山で働いている人、伐採をしている人が何人くらいみえるかは検討がつかますか。森林組合、それから会社で伐採をしている人が250名います。長野県全体では2,100人の方なんです。それで10の地方事務所ですから、それで割れば、大体、少し多いかなという気がするんですけども。人口比で言いますと、人口は木曽は1.3%の人口しかいないものですから、人口比でいえば

27人ぐらいしか山で働く人がいないはずなんですが、それが250人ということで、大変この地域はやっぱり山が、林業というのが中心になっているというふうに思います。

若い人たちがやっていますけれども、お袋の話をしますと、お袋も娘のときに営林署の下刈りか何かの仕事をやっていたようで、えらい（きつい）ということがあるものですから、若い人が森林組合に入ったなんていう話をすると、よく入ったなという話をするんですよ。そうすると、やっぱり我々年配というか、我々以上の年配の方なんかは、山の仕事はえらいということを使うんですけども、やっぱりいろいろ改善されていますので、先ほども山で働きたいという方もたくさんいましたし、我々木曽、我々長野県では、やはりそういう人が必要になってきますので、ぜひ、ひょっとしたら親父さん、お袋さんが「えらいぞ」と言うかもしれないけれども、決してそうではないということ、若い人に聞いてもらって、ぜひ、山に来ていただきたいというふうに思います。

【赤堀楠雄氏】

ありがとうございます。本当にせっかくの機会だから、会場からどなたかありませんか、ご提案、意見、人材育成、こんなことをやったらいいんじゃないかという、これは本当に大事なことだと思うんですけども。

【女性A】

ちょっと違うかもしれないんですけども、人材育成という点から意見を述べさせていただきます。

私は林業大学校出身で、その前が木曽青峰高校出身です。今は木曽に住んでいるのですが、出身は東筑摩郡です。そこから青峰高校に3年間通っておりました。林業大学校では男女とも全寮制という制度をとっていますが、青峰高校は男子寮しかないんです。

女子生徒を受け入れる体制が今、整っていないので、3年間通うことになったんですが、女子でも林業に携わりたいと考える人が増えてきているので、そういった点から男女関係なく、意欲のある生徒を幅広く受け入れてくれる体制も必要だと思うんですけども、林業に携わる皆さんから意見をお伺いしたいと思います。

【赤堀楠雄氏】

かなり具体的な問題提起で、木曽青峰高校というのは以前は木曽山林高校。山林高校は男性は寮があるけれども、女性は寮がなかったということで。

【長野県知事 阿部守一】

では、どうしていたの、下宿していたの。

【女性A】

自宅から毎日通っていました。片道、電車と原付で1時間半ちょっとです。

【長野県知事 阿部守一】

何で男子寮しかないのかね。今、林業大学校は何か女性が多いものね。わかりました。ちょっとそこはちゃんと県として問題提起、受けとめておきますので。多分、議論しても終わらないと思うので、ありがとうございます。

【赤堀楠雄氏】

ほかにどうですか、質問、意見等。ちょっと時間が、簡略に、すみません、お願いしたいので。

【男性C】

よろしくお願いします。

オーストリアの話が出たので、私、榎本さんと林大の同期生なんですが、一緒にオーストリアへ行ったんですけれども、生産性が高い林業というのはもちろんなんですが、何が一番驚いたかという、若い人たちが生き生きと林業に取り組んでいるところ。私がたまたま行った現場は二十歳で会社を立ち上げて、今、28歳で高性能林業機械、何千万円以上もしますけれども、5～6台所有しているという方もいらしたぐらいです。

そういった環境がオーストリアは整っているというか、林業イコール非常に国を支えている産業であるという認識があるので、非常に伸び伸びとやっていたんですが。ぜひ森林県から林業県へということなので、長野県、まずは長野県から、もちろん木曽もそうですが、林業という産業が主要産業として、県、木曽地域を支えていくというふうになってほしいと思うんですけれども。

具体的に、知事でも、パネラーの皆さんでもいいんですが、森林を使ってどのように、もちろん地域振興もしていかなければいけないんですが、どういう手段があるとお考えでしょう。バイオマスもそうですけど、ほかにありましたらぜひお聞かせ願いたいですが。

【赤堀楠雄氏】

いろいろな形で利用していきながら、その明るい林業にしていくにはどうすればいいのかと、そういうことですね。

【男性C】

そうですね、地域をどう潤していくかという観点から、お願いします。

【赤堀楠雄氏】

多分、一番、みんなが苦労しているところだと思うんですが、先ほどの金銭的なことも含めてありましたら。

【長野県知事 阿部守一】

これは冒頭、私は林業の素人だと言ったんで、本当は皆さんから教えてもらいたいですけれども、ちょっと私が先に話をするのは、ちょっと皆さんからもいろいろ言ってもらえればと思いますけれども。

まず、長野県を含めて、やっぱり林業政策というのがあまりにも生産に偏っていたと思っています。つくること。木を育てる、森を守る。やっぱり、需要をつくらなければいけないと思っているので、さっきの鈴木さんみたいな、やっぱり例えば木曽地域でもいろいろな技術を持っている人、いっぱいいるわけです。例えば木曽漆器の皆さんと、木曽漆器の青年部の人たちと話をすると、やっぱりデザイン性を高めたりとか、そういう工夫をしていきたいという人たちは大勢いるので、そういうことを県としても後押ししています、今。やっぱり需要を伸ばすということが、要するに木に対するニーズを、今、放っておいたら高まらない部分を、政策で増大させていくという努力が一つ必要なんだろうと思います。

そういう意味では、例えば住宅でも県産材をもっと使いやすくするようにしていくための…この間、認証をとったのは建築基準法の認証をとった「信州型接着重ね梁」。住宅用の建材で、建築基準法の認可がとれて、それで重ね張りによって張り材として用途を拡大できるようにしたりとか、あるいは、さっき言ったように、いろいろな木材製品もデザイン性を高めたりとか、あるいは、ちょっとあまりまだ進んでいないけれども、長野県は温泉が多いので、温泉の桶を県産材にかえてもらうとか、いろいろな形で、消費、需要側を広めていかないと、いくら一生懸命森林の生産の効率性を上げて、売り先がなければいけないだろうと思っています。

もう一つは、今、塩尻で、信州Fパワープロジェクトというのをやっていますけれども、あれは相当大規模な加工施設と、それからこれから発電施設も着手していきますけれども。長野県は森林県だけれども、林業県ではないねという部分の一つは、私が実体験したことの一つは、子どもの宿題で木工なんかをやろうというときに、長野市ですけれども、長野市周辺のホームセンターを回っても全然、長野県産材が置いていない。それで、例えば松本でやってクラフトフェアの人たちと話をすると、これどこの木材ですかといったら、みんな県外とか外国の木材を使っているわけです。どうして県産材を使ってくれないんですかといったら、いや県産材をどこで手に入ればいいのかわからない。これはPRも足りないし、やっぱりこれはちょっと消費、需要のもう一歩手前の流通の問題なんです、流通、流通。

だから、どうしても林業関係の人たちが集まると、生産の側のところばかり一生懸

命考える形になりがちですけれども、やっぱりその流通の話だとか消費の話だとか、そこまでひっくるめて考えていかなければいけないと思っていますので、今、県として、少しずつ輸出も含めて、消費拡大側にかじを切って取り組んでいます。

もちろん生産側の効率を上げていくことによって、生産コストを下げてもらうということも需要拡大にとって必要ですけれども、それと同時に、やっぱり用途を拡大していくという努力が必要だなというふうに思っています。

【赤堀楠雄氏】

おっしゃるとおり、末端の川下（かわしも：消費者）で、需要をいかにいい形につくっていくかということが駆動力になっていくというのは確実なので、やっぱり具体的な、その方法論というのは幾らもあると思いますので、やっぱりこの川下の需要をいい形で展開させていく、流通のあり方も含めて議論を深めていく必要があるかなと思います。

すみません、ちょっと予定していた時間が来ております。もし、最後のお一方、何かちょっと意見、質問という方がおられたらと思いますけれども、どうですか、どうぞ。

【今井竜太氏】

さっき発電所、バイオマス発電所のことについてお話があったんですが、どうしても材として出すという考えではなくて、そういった発電所をつくるにも、効率的に発電所を稼動するにも、ただ電気をつくるだけじゃなくて、タービンを回すときに温かいお湯なども出るので、塩尻とか松本のあたりは盆地でいろいろと作物もとれていいとは思いますが、こういった日照時間の短いところというのも県内にいろいろあると思うので、そういったところで発電した電気だけではなくて、施設培養とか、また福祉介護のほうも結構遅れているので、そういったバイオマス発電所の近くにいろいろな中枢を置いて、少しでもみんなが幸せになれるような方法で、少し考えていただけるとうれしいんですが、どうですか、知事さん。

【長野県知事 阿部守一】

いや、全くそうです。オーストリアに行けばみんなそうやっていますよね。やっぱり日本の場合はまだまだそういうところが遅れていると思っています。

これはちょっと私に振られたので、これ何でも行政に頼まないほうが私はいいい思っていて、自分が県知事なのにこんなことを言うてはいけないかもしれないんですけれども。これは、やっぱり例えば経済的、経営的に回っていくような仕組みを考えないと、最初から県の補助金があるから何とかできそうだという発想では多分長続きはしないと。もう本当に、例えばさっきのオーストリアの話があったけれども、今井君が自分で会社をつくって、そういうことをぜひ実現するという提案を持ってきてもらえれば、もう全面的に応援しますので、ぜひ、何というか、主体性を持って取り組んでもらいたいなと。

さっき本音でいろいろな課題も出してくれたので、君ならできるのでぜひ頑張ってください。

【赤堀楠雄氏】

ありがとうございました。実は今おっしゃったことが林業界全般に必要なことかなとも思います。先ほど知事のご発言の中にも、制度がどうだから、補助制度がどうだからということではない形で、自立した考え方でこの森に対して対峙していくということが実は、今の林業界にまさに求められていることかなということかなと、常々、僕も感じているところです。

それでは、もう時間も来てしまったので、これで終了とさせていただきたいんですけども、実はさっきの旗揚げ方式、もう一個だけ質問を用意してきたんですよ。聞くのがちょっと怖くなってしまったところもあるんですけども、せっかくだから、我々に対する宿題になるかもしれないということも含めて、お聞きしておきたいと思うんですけども。

信州の林業の将来は明るいか。皆さん、どう思っているか。明るいか、残念ながら、いや、ちょっとわからない。ちょっとこれもう感覚的にパッと上げていただいて、で、本当はこれ最初に聞いておいて、議論が終わった後に明るいという人が増えたな、よかったなで終わるつもりだったんですが、ちょっと時間の都合もありまして、一気に聞くことになってしまいました。この結果を受けとめて、我々明日からの活動にしていきたいと思います。さあお願いします、どうでしょう。

とりあえず暗いという人は少ないので、本当に安心しました。

どうもありがとうございました。少なからずの人たちが、森林や林業、信州の森林や林業の将来に期待を持っていただいているということがわかって、ホッとしました。

知事、最後に締めくくりに一言、お願いしてよろしいですか。

6 知事総括

【長野県知事 阿部守一】

今日は皆さん、長時間おつき合いいただきまして、ありがとうございます。

森林・林業を考えるとということで、2時間、お話ししましたが、まだまだちょっと、ちょうど盛り上がってきたところで、これ終わってしまっただけじゃないなと思うんですけども。次に向けての課題が、私としてはクリアになりつつあるなと思いますし、皆さんも何か一つずつぐらいは、気づきを持ってお帰りいただけるのではないかなというふうに思います。

今日は3人の方に事例発表してもらいましたけれども、やっぱり私はこの信州の林業、明るい手を挙げたんですけども、明るいのは、やっぱり若い人たちが、最近、やっ

ぱり林業に関心を持ってくれる人が増えてきているというふうに思っていますし、それだけじゃなくて、都会の暮らしに疑問を持っている人たち、ちょっと言い過ぎかもしれませんが、そういう人は私、確実に増えていると思っています。ただ、まだそういう感覚が世の中のメジャーになっていなくて、若干、まだマイノリティかなというふうには思いますけれども、でも、確実に増えてきていますよね。林業大学校の若者たちは、まさにそういう感覚を持ってきていると思いますし、鈴木さんみたいなかたちで、製造業からこういう木にかかわる仕事に転じてくれている方もいるということは、大変、私としては頼もしいなというふうに思っています。

ぜひ、これまでの長野県の林業を支えてもらってきた先輩たち、先達の皆様方の苦勞というのは大変なものがあったというふうに思いますけれども、今、そういう苦勞の成果として、この木曽地域はやっぱり木材の生産地だということは少なくとも、いろいろ厳しい問題はあるとしても、全国から認知されているということは間違いないわけでありまして、そのやっぱりアドバンテージをしっかりと生かしていくこと、それから若い人たちの知恵と力を出してもらって、そういう中で、イノベーションというふうに鈴木さんは言ってもらっていて、私も大事だと思うんですけれども。やっぱり生産工程にしても、デザインにしても、流通にしても、やっぱり林業の分野においても、私はやっぱりちゃんとイノベーションを起こしていくということに関係の皆さんとしっかり共有して進んでいきたいなというふうに思っています。

今日、お集まりいただいた皆様方には引き続き長野県の林業政策、森林政策にご協力いただきますことをお願いすると同時に、最後に、私、申し上げたように、やっぱり例えば木曽地域をどうするか、あるいは林業どうするかというのは、私はできません。知事がこんなことを言うてはいけないのかもしれないんですけれども、私だけでは絶対にできません。やっぱりそこで本当に林業を生業としている人たち、あるいはそこに住んでいる人たちがこうしたいと、ぜひこうするんだというものをやっぱり具体的な夢として描いてもらって、その分、ここだけは県も応援してと言っただけであれば、何でも協力しますので、ぜひそういうビジョンとか夢を地域の中で、そして林業関係者の中で共有していただければというふうに思います。

今日、ファシリテーターを務めていただいた赤堀さん、そして事例発表をいただいた皆さんに心から感謝を表し、そしてお越しいただいた皆様方にも改めて御礼申し上げます、私からの最後のあいさつといたしたいと思います。

本日はありがとうございました。

7 閉会

【長野県木曽地方事務所 林務課 秋山巖】

参加者の皆様、長時間どうもありがとうございました。進行役を務めていただきまし

た赤堀様、及び、取組を発表していただいた今井様、榎本様、鈴木様にお礼の意を込めまして、盛大な拍手をお願いいたします。

ありがとうございました。

それでは、事務局から事務連絡を申し上げます。限られた時間の中でご発言いただけなかった方も大勢いらっしゃるかと思います。冒頭をお願いしましたとおり、封筒の中にアンケート用紙がございますので、ご意見などご記入していただきまして、出口の回収ボックスにご提出くださいますようお願いいたします。

それでは、これもちまして県政タウンミーティングを終了いたします。長時間にわたりご協力ありがとうございました。お忘れ物ないよう、お気をつけてお帰りください。以上でございます。